

調査の 実施

3

夏の調査

夏は夕涼みをかねて夜の調査をしてみましょう。
夜の調査にはつぎのようなものがあります。

●街路灯採集法（夜行性昆虫）

夜の街路灯の光に誘われてやって来てその下に落ちている昆虫を拾い集める方法です。この方法だと広い範囲の生きものを調査することができます。カブトムシなどのほか、ゲンゴロウ、ガムシ、タガメなどの水生昆虫も採集することができます。

おもな用具

▶ デジタルカメラ、記録用紙



●糖蜜採集法

黒糖、酒、酢、バナナなどを混ぜ合わせて作った糖蜜を、クヌギやアベマキなどの木の幹に塗っておく方法です。カブトムシ、クワガタムシなどの甲虫、オオムラサキ、ゴマダラチョウなどのチョウ、樹液を好むガなどを採集することができます。夕方に糖蜜を塗り、次の日の朝には見回しましょう。

おもな用具

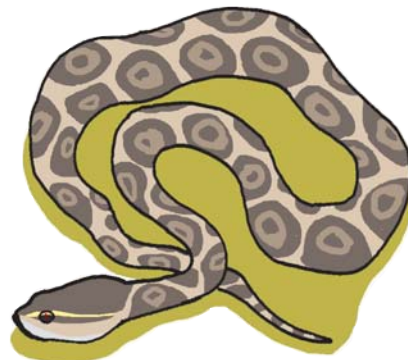
▶ 糖蜜（黒糖、酒、酢、バナナなどの混合）、ハケ、容器、デジタルカメラ、記録用紙

里山やその周辺で注意したいこと

＜マムシやヒルにかまれないように足元を防御しよう！＞

里山やその周辺、田んぼまわりの草むらなどにはマムシが生息しています。マムシは秋になると、体を温めるため山道などの日当たりのよい場所に出てくるので、秋も注意が必要です。

またシカやイノシシが増え、人里近くまで降りてきている地域ではヤマビルがいます。長ぐつをはく、ズボンのスソを靴下に入れるなどして、かまれないように足元に注意して歩きましょう。



＜スズメバチなどの巣を避けよう！＞

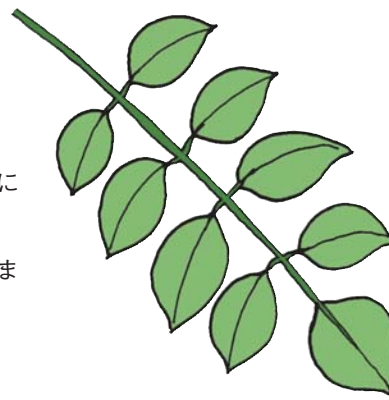
里山に入るときはスズメバチやアシナガバチに注意しましょう。特に地中に巣をつくるオオスズメバチは巣に近づくと攻撃してくるので、たいへん危険です。オオスズメバチが頭の上をゆっくり飛ぶようなら、近くに巣がある証拠です。体を低くして静かに後ろに下がり、巣から遠ざかりましょう。走って逃げると攻撃してきます。

ハチの巣は秋になっても大きくなり続け、ハチはより攻撃的になるので、寒くなるまでは注意してください。

＜ウルシの仲間にさわらないように！＞

里山に入るときはウルシの仲間（ツタウルシやヤマウルシ、ハゼノキなど）に注意しましょう。さわるとかぶれます。

また、林にはヤブカがたくさんいます。腰に蚊取り線香をぶら下げて行きましょう。



ここを
チェック

（ひとくちアドバイス）

夜行性の生きものを調査するときは調査時刻を工夫し、昼間に十分な下見を行ってから実施しましょう。



調査の実施

3

夏の調査

強い日差しが照りつける夏は、生きものたちの楽園です。

虫や魚、野鳥たち、そして草や木の小さな命がぐんぐん育っていきます。

調査の対象も大きく広がります。ただし、真夏の調査には、帽子や飲み物、虫さされなどの対策を忘れずに。

夏

ヒョウモンチョウの仲間 体長3〜4cm 開張4.5〜5.5cm



アザミの花などの蜜を吸いに現れる。暖かい地方では盛夏に休眠し、秋から活動を再開する。
(写真はクモガタヒョウモン)

ギボウシの仲間 高さ60〜100cm



林内で咲くヤマユリやギボウシ類は、カラスアゲハなど黒い羽をもつアゲハ類の大切な蜜源。これらのアゲハはギアゲハなど黄色い羽の種と違い、日向を飛ぶと熱を持つので、それを避けるため日陰を飛ぶ。

ヤマユリ 高さ50〜100cm



里山での調査

この季節も、里山では花とチョウの調査をします。チョウでは土手などの草地でヒョウモンチョウ類など草原性の種を調査します。ヒョウモンチョウ類の幼虫の餌はスミレ類で、成虫は明るい場所で咲く花から吸蜜するので、よく管理された草地が必要です。樹液に集まるチョウも、カブトムシなどを調べるときにいっしょに調査しましょう。

カブトムシ 体長3.5〜7.8cm



クワガタの仲間 体長2〜7cm



クワガタ類の幼虫は少し腐朽した木を食べるので、シイタケ栽培で使ったほだ木の捨て場などは格好の生息地。カブトムシの幼虫はクワガタ類より腐朽の進んだ木や堆肥などを食べる。成虫はクヌギ、ヤナギなどの樹液に集まるので、それらの木の分布も調べる。
(写真はノコギリクワガタ)

フナの仲間 体長6〜25cm

ギンブナ、ギンブナ、ゲンゴロウブナなど、川や湖に広く生息する。
(写真はギンブナ)



ドジョウ 体長10〜15cm

田んぼや水路、池などの浅い泥底の中にすむ。5対10本のひげをもつ。



タモロコ 体長6〜9cm



もともと静岡県より西にすんでいた魚だが、移植されて関東、東北でも見られるようになった。

田んぼでの調査

夏の田んぼは中干し期なので乾いており、水路も水がないことがあります。この時期、支線用水路、小用水路、小排水路、支線排水路、幹線排水路のどこが乾いているか、魚がどこにすんでいるかを調べましょう。

ハッチョウトンボ 体長1.5~2cm

アブなどに間違えられることもある日本で一番小さいトンボ。湿地や休耕田などにすむ。



ハラビロトンボ 体長3.2~3.9cm

若いうちはムギワラ模様で、成熟するにつれて黒から青っぽい色に変化する。湿地や休耕田で見られる。



ミズニラ 高さ10~30cm

水底に根を張り、ニラのように細い葉をもつタの仲間。よく似た種にミズニラモドキがある。



谷津田での調査

ハッチョウトンボやハラビロトンボは休耕後2~3年目の湿った水田に多く見られます。これらのトンボを保全しようと休耕田を池にすると、ほかのトンボのヤゴが入り、両種は食べられて姿を消します。



オニヤンマ 体長9~11cm

水路の上などをパトロールするように飛ぶ日本最大のトンボ。幼虫(ヤゴ)期間が長いので、水が涸れてしまうようなところでは生息できない。

ハグロトンボ 体長5.5~6cm

黒い羽をひらひらさせて水草の茂った水路の上などを飛ぶ。ゴクラクトンボ、ホトケトンボの別名もある。



水路での調査

トンボの幼虫(ヤゴ)を調べる。

オニヤンマのヤゴは成虫になるまで3年かかるので1年中水がある水路が必要。また、産卵はメスが飛びながら尾を砂の中に差し込んで行うので、水深が10cmより浅く砂底の部分があることが必要です。

ハグロトンボの場合、ヤゴがつかまって生活する沈水植物が必要。また、メスがその上にとまって産卵できるような植物体の一部が水面に浮いていることも必要。羽化後、未成熟なうちは暗がりを好むため、薄暗い林が水辺近くにあることも必要です。

シオカラトンボ 体長4.8~5.5cm



オスのおなかが塩をまぶしたようなので、この名がついた。メスはムギワラトンボとも呼ばれる。



ギンヤンマ 体長7~8cm

流れのない広々とした水辺をゆうゆうと飛ぶ。移動中により水域があれば定着することもある。

コシアキトンボ 体長4~5cm



腰の部分が白くて、空いているように見えるところからこの名がある。メスは帯が黄色い。

オオヤマトンボ 体長7.8~9cm



オニヤンマに似た黒と黄色のまだら模様の大型のトンボ。明るく開けた池などに見られる。

ため池での調査

ギンヤンマがいなくて、コシアキトンボ、オオヤマトンボだけがいるため池はオオクチバス、ブルーギルがいる可能性があります。ギンヤンマのヤゴは草の茎につかまって生活しているので、これらの魚に食べられやすいのに対し、後の2種のヤゴは石の下や泥の中などに潜っているので食べられにくいからです。シオカラトンボのヤゴも体が泥でおおわれているので食べられにくく、オオクチバス、ブルーギルがいる池でもいることがあります。

サギソウ 高さ30cm



白いサギが飛んでいるような花の形をしていることからこの名がある。湿地に生え、7月頃開花する。



ヘイケボタル 体長0.7~1cm

田んぼや水路、湿地などにすむホタル。7月ごろから現れ、8月中旬ごろまで見られる。